オポナカムラ彩発見!!

オポナカムラは古代語で「大中村」の意。
国指定史跡「大中遺跡」の最新の調査をもとに、様々な観点からふるさとの誇れる遺跡について考えてみたいと思います。

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079（435）5000

第20回大中遺跡まつり
ヒメミコ

播磨町マスコットキャラクター
いせきくん、やよいちゃん

9 銅鐸から銅鏡へ！

弥生時代の初めには、青銅器が祈りの道具として使われるようになりました。近畿地方では、まつりの代表的な道具は銅鐸で、米の豊作を願うムラのまつりに用いられていました。当初は小型で、木などにつり下げて打ち鳴らし、稲の神や土地の神を呼び起こす道具として使われました。しかし、しだいにつり手の幅が広くなり、大きなものが造られるようになると、装飾も多くほどこされ、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へと用途が変わっていきました。「見る銅鐸」は、近隣のムラとの争いを避け、友好関係を結んだ証として使われていたと考える人もいます。

しかし、オポナカムラ（大中遺跡のムラ）が栄えた弥生時代の終わりになると、巨大化した銅鐸は、土に埋められるか、細かく打ち割って壊されるかされ、突如その姿を消してしまいます。

これに変わって使われ始めたのが、銅で造られた鏡です。銅鏡は、弥生時代の中ごろ、すでに中国から持ち込まれていました。大中遺跡では、「内行花文鏡片」が、昭和38年の発掘調査で竪穴住居跡から見つかっています。灰の混ざった住居の床面は、非常に固い土の層だったので腐敗が少なく原型をとどめている。この鏡の破片は、発見当時、使い道をめぐって大きな話題となり、大中遺跡の存在を全国に知らしめました。鏡片は「破鏡」と呼ばれ、ムラの権力者か巫女が首からかけてお祈りをしたときに使った道具だと考えられています。

巨大化した銅鐸が、突然生産されなくなり、生活の中から消え去った時期と、卑弥呼が登場し、鏡が祭事などで使われ始めた時期が一致しています。当時は、ムラとムラとの争いが絶えず、人々は平和な暮らしを求めるようになっていました。しかし、男の王の支配のもとでは、国々が従わず、争いは続きました。そこで、神の声を聞くことができる巫女として、「卑弥呼」が新たな統治者に選ばれたのです。女王「卑弥呼」は、銅鏡を分配することで忠誠心を高め、支配を広げていったと考えている研究者もいます。卑弥呼の治めた邪馬台国と大中遺跡は同時代ですから、もし、近畿地方に邪馬台国があれば、貴重な資料が大中遺跡から出土するかもしれません。

※大中遺跡の20％が調査されています

広報はりま　発行／播磨町役場　〒675－0182（個別番号）　兵庫県加古郡播磨町東本荘1丁目5番30号　TEL 079（435）0355　FAX 079（435）0609　編集／企画グループ　印刷／明光印刷
播磨町のホームページアドレス http://www.town.harima.lg.jp
〃 Eメールアドレス kikaku@town.harima.lg.jp

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association

町の人口 11月1日現在（住民基本台帳人口＋外国籍人口）
34,190人（＋8人）　男…16,790人（＋8人）　女…17,400人（±0人）　世帯数…13,630（＋3）